



栗嶋堂



謝蕪村の句碑富岡鉄斎揮毫の扁額「風有心」  
(画像提供:栗嶋堂宗徳寺)

## 第九号 平成28年12月1日 与謝蕪村の句碑(栗嶋堂)

「菜の花や月は東に日は西に」などの句で知られる俳人で画家の与謝蕪村は、享保元年(1716)に攝津国東成郡毛馬(ひがしなりぐんけま)村に生まれ、今年で生誕300年になる。同時代に活躍した画家に、伊藤若冲、円山応挙、池大雅などがいる。

蕪村は20歳前に故郷を離れて江戸へ行き、「布団着て寝たる姿や東山」の句で有名な 服部嵐雪(はっとりらんせつ)の門人、早野巴人(はやのはじん)(夜半亭宗阿(やはんていそうあ))に俳諧を学んだ。

36歳から京都の四条烏丸東入に移り住み、天明三年(1784)十二月に68歳で歿した。(この間、丹後や讃岐に滞在していた時期もある)

「栗嶋へはだしまりや春の雨」

この句は、蕪村がひとり娘(くの)の病氣平癒祈願のために、栗嶋堂宗徳寺(そうとくじ)(京都市下京区三軒替地町124)に参詣した時に詠んだものである。

栗嶋堂は、お寺の『ご由緒』によると「宝徳年間(今から約600年前)に南慶(なんけい)和尚が紀伊の国、淡島にて虚空蔵菩薩像を感得せられて上洛の途上、俄かにこの辺りで重くなったのを、ご神意として鎮守・栗嶋明神としてお祀りしたのが始まりといわれています」とあって、古くから「あわしまさん」と呼ばれ、諸病平癒、所願成就、良縁、子授け、安産など女性の守護神として信仰をあつめてきた。

やわらかい春の雨に濡れながら、境内の石畳を素足で「お百度参り」をする様子を描いたこの句は、古くからの淡嶋信仰の姿を彷彿とさせる。栗嶋堂はかつての島原遊郭に近く、素足の主はこの島原に住む女性だったのかもしれない。

栗嶋堂へは多くの貴人、有名人も参拝に訪れている。その中のひとり、文人画家の富岡鉄斎が寄進した扁額が、今も寺に残されている(扁額は非公開)

NPO法人京都観光文化を考える会・都草

特別顧問 坂本 孝志